

シリーズ「遺跡を学ぶ」

135

ヤマト王権誕生 の礎となったムラ

唐古・鍵遺跡

藤田三郎

新泉社



ヤマト王権誕生の 礎となったムラ

―唐古・鍵遺跡―

藤田三郎

【目次】

第1章 弥生研究の基礎をつくった遺跡……………4

- 1 はじまりは「鍵の遺跡」……………4
- 2 証明された弥生時代の農耕……………9
- 3 遺跡保存へ向けて……………16

第2章 明らかになる大規模弥生集落……………23

- 1 唐古・鍵遺跡の建物構成……………23
- 2 中枢部はどこか……………34
- 3 多重環濠と井戸……………37
- 4 分村と墓……………41

第3章 拠点集落の生産力……………46

- 1 土器・土製品の生産と交流……………46
- 2 木器・木製品の生産……………51
- 3 石器・石製品の生産……………55

第4章 唐古・鍵ムラの精神生活……………65

- 4 布・編み物製品の生産……………58
- 5 青銅製品の生産……………61
- 1 描かれた弥生神話……………65
- 2 清水風ムラは、唐古・鍵ムラの祭場か……………69
- 3 記号土器……………73
- 4 魔除けにされたイノシシの下顎骨……………75
- 5 道教と禹餘糧……………76

第5章 唐古・鍵ムラの終焉とその後……………79

- 1 ムラ環境の変化……………79
- 2 唐古・鍵遺跡から纏向遺跡へ……………82
- 3 王権誕生の地……………87

- 参考文献……………91

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 弥生研究の基礎をつくった遺跡

1 はじまりは「鍵の遺跡」

「鍵の遺跡」

奈良の平城京から橿原神宮へと国道24号を南へ三〇分ほど車を走らせると、国道東側の視野がにわかに広くなり、渦巻飾りをもつ異様な二階建ての建物が目に飛び込んでくる。唐古・鍵遺跡のシンボルとして、一九九四年に復元された楼閣が、二〇一八年四月の「唐古・鍵遺跡史跡公園」の開園にあわせてリニューアルされ、天空にそびえ立つ。二〇〇〇年前に、この地にはヤマトを束ねた弥生時代の巨大集落があったのだ（図1・2）。

公園の中央には「大和の皿池」のひとつ、唐古池が満々と水をたたえている。江戸時代にくられたこの溜池は弥生時代とはまったく関係ない。しかし、遺跡の名を全国に知らせることになった調査がおこなわれ、弥生時代研究黎明期の研究者たちがさまざまな遺物を採集した池

でもある。そして、弥生へ誘うタイムトンネルとなった。

この遺跡が、世に知られるようになったのは一九〇一年（明治三四）、畝傍中学の教員であった高橋健自が、「磯城郡川東村大字鍵の遺跡」として『考古界』に紹介したことにはじまる。唐古・鍵遺跡の名前は、「鍵」の名前から始まった。明治期には、遺跡は鍵や唐古のあたりというおおまかな把握であった。大正期に入ると、鳥居龍蔵がこの遺跡を「唐古」の名で紹介し、その後、梅原末治ら当時のそうそうたる考古学者たちも遺跡を訪れ、「唐古遺跡」として学会誌などに紹介し、著名な石器（弥生）時代遺跡になった。

唐古・鍵遺跡研究の礎

考古学者たちに遺跡の存在や内容を教えたのは、地元唐古在住の飯田松次郎と恒男親子である。飯田宅は唐古池の北西側にあり、唐古池は庭のような存在であった。池西側の用水路や池堤の波打ち際、池南側の水田で多くの遺物を採集した。絵画土器の一つには「池西側ノ溝



図1 ● 2018年に開園した唐古・鍵遺跡史跡公園（南から）
国道24号の両側に遺跡が広がる（420,000 m²）。国道の東側100,000 m²は、9年の歳月をかけて史跡公園として整備された。

原始農業を推測した森本六爾
飯田親子のほかにもう一人忘れてはならない人物、森本六爾がいる。森本は、桜井市大泉出身で旧制畝傍中学校卒業後、尋常高等小学校の

採集品のなかで、とくに絵画土器は注目に値する。絵画土器資料は『大和唐古石器時代遺物図集』に九点、これ以外に森本六爾に譲った一点、刊行後に採集されたと思われるもの三点の計一三点がある。当時、石器時代の絵画資料としては、銅鐸の絵画が知られている程度であったから、絵画土器の点数としては突出していた。今では、唐古・鍵遺跡の絵画土器が全国最多なのは多くの人が知る事実であるが、その兆候はすでにあらわれていた。

飯田親子の採集品は、一九二九年（昭和四）に自費出版した『大和唐古石器時代遺物図集』にその一部が掲載されている。掲載された遺物は、木製品を除くと今日知られている唐古・鍵遺跡の出土品とほとんど大差ない。すでに絵画土器やヒスイ玉、銅鏃など重要な遺物も含まれている。地表でのわずかな採集品だけで弥生時代遺跡の内容を示せることが、この遺跡の充実度をあらわしている。飯田親子の地道な採集と報告が唐古・鍵遺跡研究の礎となった。

「坤槌」と紙片が貼付されているものがある。



図3 ●『大和唐古石器時代遺物図集』

重箱判の40ページの図集。左ページは写真を配し、右ページは遺跡の状態や遺物の包含状態、石器や各種玉製品、弥生土器や絵画土器を説明する。

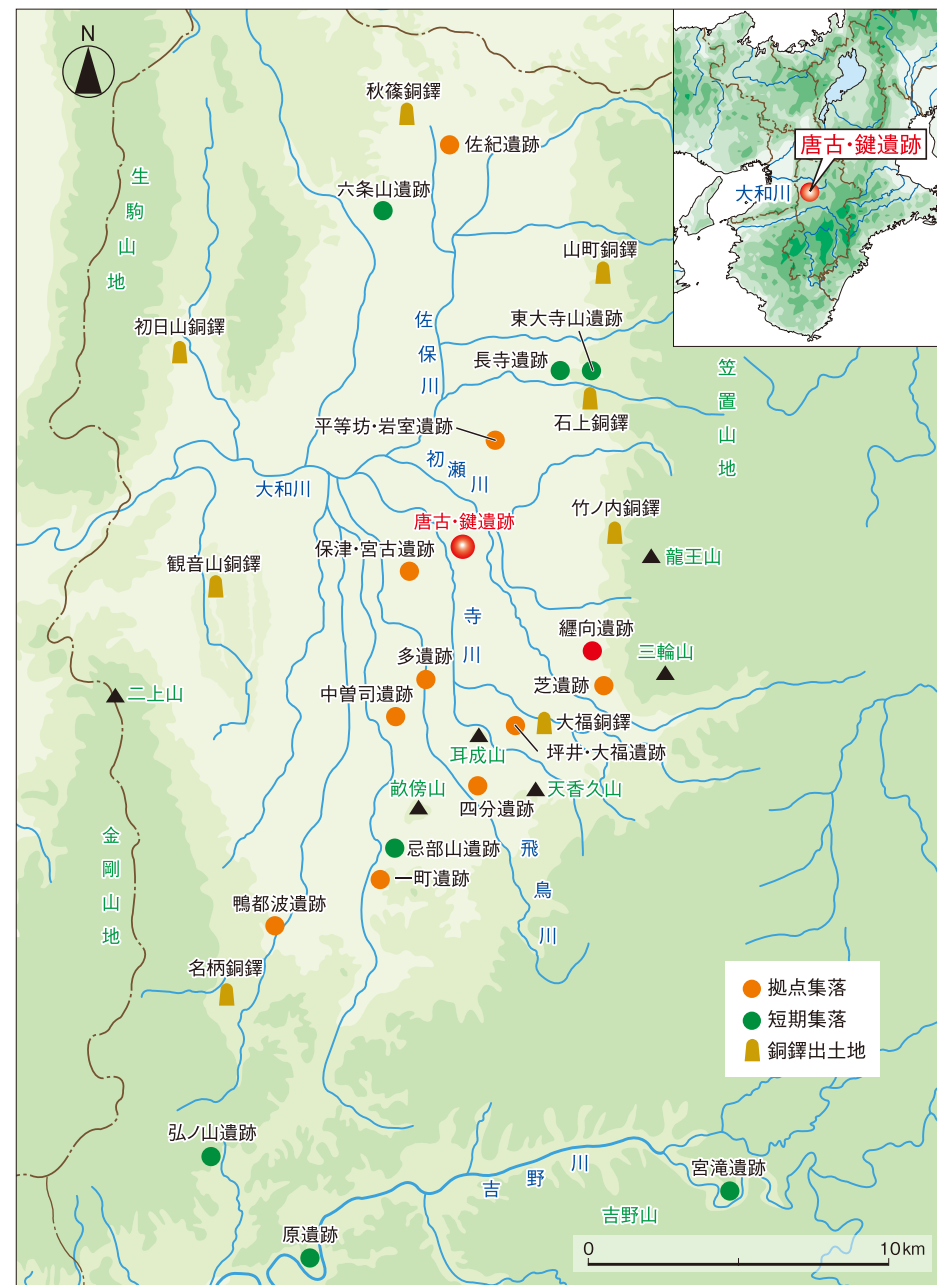


図2 ●奈良盆地のおもな弥生遺跡

奈良盆地は南北約20 km、東西約15 km、標高40～1000 mの断層盆地で、弥生遺跡600カ所のは半はこの盆地内にある。とくに盆地南部に拠点集落が多く存在する。

代用教員のかたわら、唐古・鍵遺跡をはじめとする石器時代遺跡の研究をおこない、この時代が原始農業の時代であることを証明しようとした。

飯田恒男によると、森本が唐古を訪れはじめたのは十二、三歳のころで、おそらく畝傍中学に陳列されていた遺物を見て考古学に目覚めたのであろう。熱心な考古少年で、県内の遺跡を歩きまわり遺物を採集していたようだ。飯田とも親交を深め、鳥居龍蔵の調査地点などを参考にして一九二二・二三年（大正一一・一二）には、唐古池の南側と西側、池内部の五

カ所を発掘し、層位的な検証を試みた。そして一九二四年（大正一三）には、この発掘の報告と飯田の採集資料を『考古学雑誌』に発表した。この論文では、奈良県の石器時代遺跡約九〇カ所の立地が標高五〇～一〇〇メートルに集中し、石器とともに金属器がともなうことを論じている。その後、この研究を発展させ、一九三三年（昭和八）に『日本原始農業』を著し、現在では定説となっている弥生時代の生業が農業であることを予見した。

この森本の着想の原点は、唐古・鍵遺跡の土器にあった。土器の底に**粉痕**（こみあと）をみついていたのである。弥生時代研究の黎明期にあって、農業社会を位置づけるきっかけは、唐古・鍵遺跡から採集された一土器片にあった。

2 証明された弥生時代の農耕

明らかにした弥生稲作の実態

弥生時代研究に偉大な足跡を残した森本六爾は、一九三六年（昭和一一）一月に三二歳の若さでこの世を去った。その一一カ月後、彼が追い求めていた弥生稲作の実態が明らかになる。彼が青年時代に通い詰めた唐古池で発掘調査がはじまったのだ。この運命的ともいえる出来事が、後に松本清張の小説『断碑』や藤森栄一の『二粒の籾―森本六爾伝』となり、この人物の伝記を生むことになった。

唐古・鍵遺跡の発掘調査は、鳥居龍蔵や森本六爾らによる試掘程度の小発掘があったが、現在では、一九三六・三七年の唐古池の本格的な発掘調査を第一次調査としている。一九四〇年（昭和一五）の皇紀二六〇〇年事業として、京都から奈良・橿原神宮へと向かう道路計画がもちあがった。一帯はほとんど水田だったので、道路は堤防状に盛り土する必要があった。そのため、唐古や鍵周辺では唐古池や鍵池の池底を掘り下げ、土を用意した。



図4 ● 森本六爾

森本六爾は1903年、奈良県桜井市大泉生まれ。大泉から唐古池までは約5 kmである。唐古池の調査にも参加した藤森栄一は、森本の足跡を訪ね、『森本六爾伝』をまとめた。



図5 ● 昭和20年代の唐古・鍵遺跡（西上空から）

唐古・鍵遺跡周辺は、古代の条里制区画が残る水田地帯であった。手前に白く映る横線が国道24号、中央に唐古池、上方に黒く映るのが初瀬川の堤防。唐古池は100 m四方の池であったが、江戸時代後期に北側に100 m拡張された。